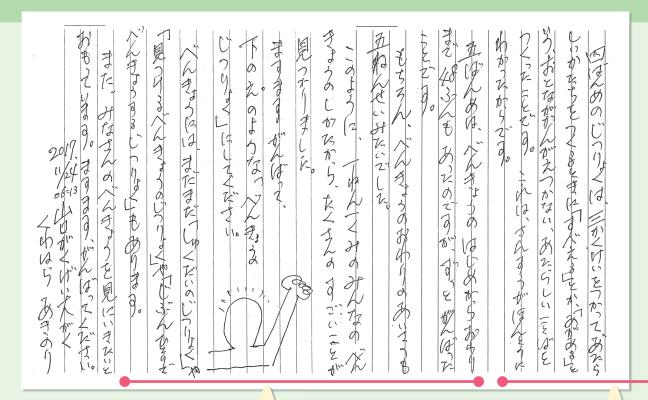
"授業参観"の手紙から学ぶ「教授学」



5番目に褒めたのは、「授業始まりの挨拶から、授業の終わりと教師の評価、そして授業終わりの 挨拶までの48分間」、姿勢も崩れることなく、算数 の内容の活発な学習と、図形独自の学習方法に終始 したことである。1年生の学習への集中力としては 見事であるという他はない。学級の実力を上げる 以下の要素を満たしていることを確認したい。

- **a**. 1 時限の授業ごとに変化発展する**「学習内容」** だけではなくて,
- b. 算数科 (図形) 独自の「学習方法」をも含み,
- **c**. どの教科・領域にも共通する「学習規律」にも 及んでいる。

最後にもう一回「腕の力こぶ」の絵を描いた。最初の絵よりも筋肉の部分を大きく盛り上げてある。授業を参観させてもらった私からの次のレベルへの願いである。

「学級(授業)の実力」は、学習規律から

これまでも授業後の検討会だけでなく、授業 終了直後の教室で黒板に「腕の絵」を書きながら、 子どもたちに向かって「『学級(授業)の実力』を 大きくしよう!」と呼びかけてきた。

最後に、授業での勉強には、「宿題の実力」や 「見つける勉強の実力」、さらに「自分一人で勉強 する実力」があることも付け加えている。 3番目に褒めたのは、担任が発問を投げかけたあとの 子どもたちの活動である。

多くの若手の授業や秩序のない教室で見かけるのは、教師の発問直後の勝手な発言(私語)である。それも数人の特定の子どもだけが発言してしまって、他の多くの子どもの発言の機会が奪われることが多い。この学級では、勝手な発言をする子どもはおらず、すぐに多数の子どもの手が挙がる。そして先生に指名されたあとで、クラスの子どもたちに向けて発表していることである。

4番目に褒めたのは、実物を使った算数の図形学習独自の学習方法を駆使して、移動の仕方の違いを「すべえる」や「あがある」などの操作方法に関する言葉を、自分たちで作り出し、共通理解をしたところである。この図形の移動と変化の内容を理解するための学習方法の発見といってもよい。この移動という方法は、他の図形学習でも使える。

聞き手を意識し呼びかける発表の仕方

前のページの授業記録の中では、教師から指名された子どもたち3人が「前に出て(黒板のところで)説明します。」と言ったあと、自分の席から黒板前まで出たあとで算数の内容を説明している。黒板は、他の子どもに説明したり説得したりするためには最も便利な場所なのである。さらに、Y児のように「聞いてください。」と聞き手に呼びかける発言も多く出てくる。

これは筆者が参加した授業研究会の後, 授業を公開した小学校1年生の子どもたち に宛てた手紙です。参観2日後の朝早く書 いて、学校に届けました。

授業で教師が指導するのは、次の3つです。

- a. 1時限の授業ごとに変化発展する「学習内容」
- b. その教科・領域に独自の「学習方法」
- c. どの教科・領域にも共通する「学習規律」

ここでは、学習規律を中心に5つの活動を高く評価しました。



を見せてもらった めはら なせん はんめは しのまえ 龙光 んのと DEB 1 typ あすめ Ø Tr 1月22日の こう めあていを 0) たのは H 1/2 年みな 72 かけごえど、 13 11 金にあてら かく 1 £) K 2 きょうの 70 6 といては 20 んなが かくの へきょうと L Ta んも 15 N is きみ

2番目に褒めたのは、教師の示した「本時のめあて (目標)」を一斉に音読したことである。授業の始めで あるのに、一人残らず声を出して音読できるという ことは、全員参加の対話型授業となるための出発点 である。

主体的で対話的な授業を実現するためには、まず 子どもたちが一人残らず「めあて」を意識し、音読と いう基本の学習活動に参加できなくてはならない。

主体的で対話的な授業の入り口

これまでに参観してきた多くの授業では、最初に 教師が「めあて」を板書する。新任教師の多くの教 室では、この「めあて」をノートに書くところから 簡単に私語が生まれ、学習への集中が途切れる。

だから、「めあて」を子どもに書いてもらうために 教師は、すでに「めあて」を書いた紙を準備すれば よいのである。最初に、何度か一斉音読をして、全員 の口が開いていることを確かめ、そのあとでノート に書いてもらう。教師は、その間に、赤ペンを持って 机間指導をしながら評価すればよいのである。





手紙の最初で、1年1組の子どもたちの「授業の始まりの見事さ」について褒めた。教室の前に立った日直の子どもたち2人は、大きく、はっきりとした声で「なぎレッチ!」と呼びかけた。すると、子どもたちの力だけで、あたかも「自動的に始まった」と思われるように、授業は開始されたのであった。

ここで褒めた「授業の始め方」が上手だということは、小学校の子どもたちの言葉で言えば、「授業の実力」ないしは「学級の実力」があるということである。教師の言葉で言えば、「学習規律」の実力である。1年生にも理解できる言葉としては「勉強の実力」である。その言葉を「かぎ」に囲んでおいた。そして、すぐ下に「腕の力こぶ」の絵も添えておいた。

「授業の始め方」⇒最初の5分の大切さ

「授業の始まり」でその授業の学習活動の成立が 決まる。学力向上の決め手は、授業の始まりであると 言える。

「授業開始の5分」は、たったの"5分"に感じるかもしれないが、45分の授業の9分の1である。年間の授業時数を900時間とすると、100時間に相当する。授業が5分遅れるということは、年間100時間を無駄にしているということでもある。「学力向上」は授業始まりから出発する。

30